

名誉会員 小林宏治氏を悼む



本会の第8代及び第12代の会長であり、名誉会員でもあった日本電気㈱の名誉会長 小林宏治氏は去る平成8年11月30日、89歳の生涯を閉じられました。

小林名誉会員は本会において2回も会長を勤められOR学会の発展に大変貢献されました。

明治40年2月17日、山梨県で出生され、昭和4年東京帝国大学を卒業後、日本電気に入社され独自技術の開発に努められ、我が国の通信機器の発展に多くの成果を挙げられました。

ORとの出会いは昭和28年頃であったと思います。その当時取締役で玉川工場の責任者であった小林名誉会員から私に「ORとは一体何なのか説明してくれないか」という電話がありました。その頃私自身ORの考え方、方法論に大変興味を持っておりましてので早速出掛けてモースとキンボールの共著「methods of operations research」の中の例をあげながら説明致しました。それ以後ORに大変興味を持たれ、「この問題はORによって解けないだろうか」と何度か質問がありました。

昭和39年に社長に就任され、経営刷新にリーダシップを発揮されました。事業部制の改革、地方分身会社の設立、点から面へのトップ構造、クオリティ作戦と次々と事業の刷新に手をつけられ、多くの成果を挙げられました。これらの活動と平行して情報化時代に重要な道具であるコンピュータの経営管理への利用に大変関心を持たれました。OR自体も次第に高度化し、その頃からコンピュータ無くしてはORの問題が解けないようになり、ORとコンピュータが密接な関係になってまいりました。小林名誉会員から「社内にOR委員会を作ったらどうか」という提案があり、私を含め数人の若い社員による社内のOR委員会をスタート致しました。

以上のように日本電気株式会社の社内ORは小林名誉会長が生みの親でありました。ORに関する社外活動としては昭和44年から46年及び昭和53年から54年と2回OR学会の会長を勤められ、如何に学会の会員数を増やすかに努力され、我が国のORの発展に大変貢献されました。

小林名誉会員とORとの関係で忘れられないのはローマクラブとの関係であります。小林名誉会員はローマクラブのメンバーの一人でありました。ローマクラ

ブはその活動として「成長の限界」というレポートを発表されました。この背景にはORの方法論として開発されたインダストリアル・ダイナミクスがあり、この面からもORの重要性を認識されていた方でした。もちろん、ローマクラブに入会されたのはそのことばかりでなく、オリベッティ社のペッチェイ氏に会われ、自分の孫達の時代の地球の環境保護を考えるべきだという話に心から賛同されたからであります。

ご一緒に海外出張した際に、空港で孫たちへの土産を何にするか楽しそうに選んでおられた姿が今でも目に浮かんで参ります。

心から御冥福をお祈り申し上げます。(水野 幸男)

故小林宏治氏略歴

明治40年2月17日 山梨県生まれ
昭和4年3月 東京帝国大学工学部電気工学科卒業
昭和4年4月 日本電気株式会社に入社
昭和14年3月 東京帝国大学から工学博士の学位を授与される
昭和39年11月 日本電気株式会社 社長
昭和41年4月 電気四学会において知識産業の概念を発表
昭和51年6月 日本電気株式会社 取締役会長
昭和63年5月 同社 取締役名誉会長
平成2年6月 同社 名誉会長相談役
平成8年11月30日 逝去(89歳)

〔OR学会関係〕

会 長 昭和44～46年度
名誉会員 昭和48年
会 長 昭和53～54年度

〔受 賞〕

昭和32年10月 紫綬褒章受章
昭和39年10月 藍綬褒章受章
昭和52年4月 IEEEからフレデリック・フィリップ賞受章
昭和53年4月 勲一等瑞宝章受章
昭和59年5月 IEEEからファウンダーズ賞受章
昭和63年11月 勲一等旭日大綬章受章
平成8年11月30日 正三位に叙せられる